やまなし
医療最前線
現場を支える
県立中央病院から
〈239〉

# 薬剤師 がん患者をサポート
# 多様化する副作用に対応

新薬の登場や適用範囲拡大によって、がん薬物療法の発展が目覚ましい。山梨県立中央病院では「薬のプロ」である薬剤師が中心となり、副作用への迅速な対応や通院によるがん患者のサポートに向けた取り組みを進めている。同院薬剤部主任薬剤師の松本香織さんは「安全で有効な治療につなげるために、さらに取り組みを充実させたい」と前を向く。

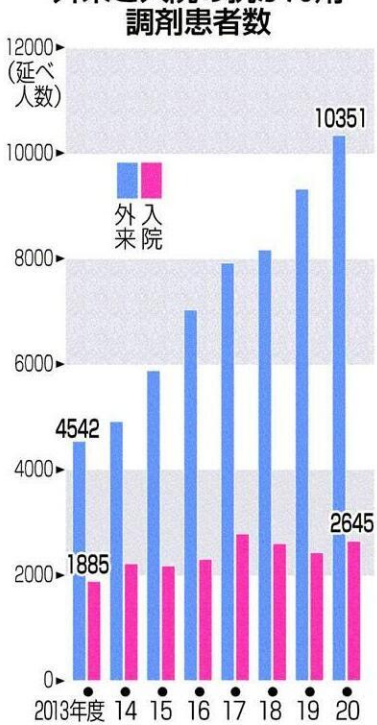
松本香織
主任薬剤師

新たなタイプの抗がん剤には、特定のがん細胞を狙い撃ちする「分子標的薬」、免疫ががん細胞を攻撃する力を維持する「免疫チェックポイント阻害薬」がある。いずれも普及が進んだ結果、治療実績の向上につながっている。

一方で薬には負の側面がある。免疫チェックポイント阻害薬では肺炎のほか、肝臓や甲状腺の機能低下、糖尿病などのリスクを高める可能性がある。松本さんは「多様化する副作用への対応が欠かせない」と強調する。

同院は薬剤師が中心となり、医師や看護師とともに部会を設立。免疫チェックポイント阻害薬による副作用の早期発見につなげるための検査項目を洗い出し、各診療科で共有している。副作用が起きた際の対応もまとめ、安全な治療に向けた院内体制を整備した。

このほか、薬剤師はがん患者の検査の数値などを踏まえ、医師が処方した抗がん剤の投与量やスケジュールをチェックしている。点滴の抗がん剤の調剤は薬の種類や投与量のミスを防ぐシステムを導入し、無菌室で正確かつ衛生的に行っている。




通院でがん治療を行う同院通院加療がんセンターには、専門知識を持った「がん薬物療法認定薬剤師」を配置。患者が自宅で副作用などに自ら対処できるようにきめ細かくサポートしている。

現代では通院によるがん治療が主流となりつつある。点滴の抗がん剤を調剤した同院の外来患者は2020年度に初めて延べ1万人を突破。13年度の2倍以上となった。14年度以降延べ2千人台で推移している入院患者とは対照的となっている。

今後も外来患者の増加は見込まれ、松本さんはがん薬物療法認定薬剤師のさらなる育成を目標に掲げる。「外来患者の支援には地域の薬局との連携も欠かせない。治療内容や副作用の状況など情報共有を図っていきたい」と話している。

＝第2、4木曜日に掲載します

掲載日:2022年01月13日／ぶんくら／紙面頁012
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社